

地蔵院

嵐山の地蔵院の境内にある圧巻の竹林は、「竹の寺」という愛称の由来となっています。地蔵院は、1367年に足利幕府の高官、細川頼之（1329年～1392年）が禅僧の碧潭周皎（へきたんしゅうこう、1291年～1374年）を開祖として招いて建立しました。この寺は応仁の乱（1467年～1477年）で焼失し、1686年まで放置され、その後規模を縮小し再建されました。現在、竹林以外にもこのお寺は苔に覆われた庭園と鮮やかな秋の紅葉でよく知られています。地蔵院は臨済宗のお寺です。

境内

総門から続く参道には紅葉や、背の高くて茎が太い孟宗という竹の一種が植えられています。本堂は地蔵堂とも呼ばれ、本尊である地蔵（旅人や子供を守るとされています）立像が安置されています。平安時代（794年～1185年）に彫られたと言われています。本堂の左側には、寺院の創立者の墓と歌僧である一休（1394年～1481年）とその母親の彫像があります。一休は天皇の落胤とされ、幼少期に地蔵院にて人目を避けて隠遁生活を送っていたと伝えられています。

方丈と庭園

少し離れた方丈には様々な芸術品が展示されています。（季節によって、展示品が入れ替えられる可能性があります。）細川家現当主の襖絵や襖書、16世紀のキリシタン貴族細川ガラシャを描いた屏風、悟りへの歩みを描いた「牛十図」屏風、旧本堂より保管された龍の木彫りなどが展示されています。小さな祭壇には北方の守護神である毘沙門天の像が安置されています。部屋の1つにはハート型の猪目窓があり、方丈の背後にある竹、紅葉、椿を一望できます。イノシシは山火事に最初に気づいて逃げる動物であるため、猪目の形は火事から身を守ると信じられています。

一部の仏教の宗派では、僧侶は気を散らさないように壁に向かって座禅をするか、目を閉じて座禅をすることを求められますが、臨済宗では僧侶が縁側に座って庭に向かって座禅することを認めています。方丈の隣にある「十六羅漢の庭」は、枯山水の庭園ですが、地蔵院が荒廃した際に苔が生い茂りました。羅漢（arhat、日本語で rakan）とは、悟りを開き、仏陀の教えの真理を理解した聖人のような人物です。この庭園で羅漢は、わずかに左を向いた大きな石で表現されています。寺から南南東側の山頂にある、日本と皇室を守護するために創建された重要な石清水八幡宮を信心深く見つめているかのようです。また庭には、樹齢 500 年の松や樹齢 350 年の椿などの植物もあります。

方丈の引き戸の後ろを改築した専用スペースには、艶やかで黒いピアノが隠されています。「寺ピアノ」のイベントが開催される特別な日には、鳥のさえずりや、庭にそよぐ風の音が自然のバックミュージックとなってくれます。